「価値観」をめぐる諸研究
—国家・民族・時代による価値観の違い—

千葉大学自然科学研究科

花井　友美

「エコ・フィロソフィ」研究　第１号

Eco-Philosophy　Vol.1

東洋大学「エコ・フィロソフィ」

学際研究イニシアティブ　２００７年３月

TIEPh
Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

「価値観」をめぐる諸研究
−国家・民族・時代による価値観の違い−

千葉大学自然科学研究科　　花井　友美

1.　価値観研究の重要性

１−１.「価値観」とは何か？

「価値観」は、文化人類学、社会学、社会心理学、心理学等の様々な学問領域で研究対象として扱われている。また、学問領域のみならず、日常場面のおいても、「あの人とは価値観が合わない」、「価値観の転換が迫られている」といったように、価値観という言葉は多用されている。このように価値観が様々な領域で幅広く用いられているゆえに、「価値観とは何か？」という問題に対して、明確な答えを出すことは難しい。広辞苑（第五版）によると、価値観とは「個人もしくは集団が世界の中の事象に対して下す価値判断の総体」であり、やはり価値観が漠然とした概念であることが窺える。つまり、人々を取り巻く環境や物事に対する考え方や感じ方、好みといったものを、価値観という言葉で総合的に表現していると考えられる。

１−２．価値観の特徴

このように、価値観とは漠然とした幅広い概念である。しかし、価値観についてのこれまでの様々な研究を概観すると、以下の３つの価値観の特徴が見えてくる。

一つ目は、「個人・集団の意思決定・行動への影響力」という特徴である。価値観は、個人あるいは集団の意思決定や行動に影響を与える。価値観は、常識や教えとして人々の生活に根付き、生活スタイルや生活習慣、人間関係のあり方をある程度規定する。たとえば、アメリカのように個人主義という価値観が重視される社会では、人と人とは対等な存在として扱われ、個人が自立した生活を行うことが評価され、権威主義的な態度の反発する傾向が見られる。一方、日本のように縦関係と横関係が混在している社会では、年長者や目上の人への敬いや先輩後輩関係が重視される一方、内輪の和も重んじられる。

二つ目の特徴は、「集団の人間関係の調整機能」である。内堀（2005）は、集団内の人間関係を調整しているのは、その集団の人々に共有された世界と人間についての認識であり、価値観であると述べている。価値観は、行為に対する善悪の判断や名誉と不名誉の判断、社会的やり取りに対する公平と不公平の判断や損得の判断などの形で人間関係のあり方を直接的に規定する。さらに、身の回りの世界を様々に区分する仕方、またその区分に応じた行動の判断など、環境認識のあり方として表出することで、間接的にも人間関係を調整する。

三つ目の特徴は、「文化における共通性」であり、ある特定の文化を持つ人々の中で共通の価値観がある。Kluckhohn & Strodtbeck（1961）は、スペイン系アメリカ人、テキサスの農業従事者、モルモン教徒、北アメリカ先住民族のナバホ族、ズニ族の５つのコミュニティでの調査から、「人間性志向（人間の本質的特徴は善か悪か、またそれらは変容していく

ものであるのか)」、「人間対自然志向(人間と自然の関係はどのようなものであるか)」、「時間志向（現在、過去、未来のいずれを重視するのか)」、「活動志向（ありのままの姿、なるべき姿、何をするのかのいずれを重視するのか)」、「関係志向（縦関係のつながり、あるいは横関係のつながりを重視するのか、個人主義か)」が社会や文化によって異なることを見出した。そして、これらの文化に根付いた価値観は、10 歳くらいまでの社会化の過程において身につけられると指摘している。

１－３．価値観研究の意義

以上述べたように、価値観には「個人・集団の意思決定・行動への影響力」、「集団の人間関係の調整機能」、「文化における共通性」といった特徴がある。そして、これらの特徴ゆえに、価値観を研究することには意義があると考えられる。価値観が「個人・集団の意思決定・行動への影響力」を持つゆえに、価値観を研究することによって、そこで生活する人々や集団がどのような判断をし、どのような行動を取るかを理解することができよう。また、価値観が「集団の人間関係の調整機能」を持つことから、ある集団における人間関係のあり方を解釈することができよう。そして、価値観の「文化における共通性」の特徴ゆえに、ある個人や集団がどのような価値観を持っているかについて研究することで、その個人や集団が属している文化のあり様を知ることができよう。

このような学問的な意味合いでの研究意義のみならず、現実社会の問題においても価値観研究の重要性は高まっている。地球上の様々なところで巻き起こっている紛争の根本には、国家間あるいは民族間での価値観の相違がある。地球上には 190 余りの国家があり、それらの国家を構成している民族は数千にも及ぶと言われている。そして、それらは皆それぞれに異なった文化背景と価値観を所有している。異なった価値観を所有する国家あるいは民族が接触したときに、互いの価値観が顕在化し、時に衝突が起こる。特に国際化が進みつつある現代では、国境を越えて移動する人々が増えている。その結果、異なった価値観を持つ人々と接触することが増加し、価値観が衝突する機会も増えてきている。そういった中で、地球上には多様な価値観が存在することを認識し、自分あるいは自分が属する集団以外の価値観を知ることが求められているであろう。次節以降では、これまで行われてきた価値観についての研究を概観する。

2.　文化人類学における価値観研究

２－１．文化人類学と価値観

人々は地球上の様々な場所で生活しており、そこには様々な社会や文化が存在している。文化人類学では、人々が生活する場所の環境、そこで構成される社会・文化の多様性に注目し、主にフィールドワーク（自分たちと異なる文化を持つ地方へ赴き、長期にわたり現地の人々と衣食住をともにすることによって、その土地の生活の仕方や風俗・習慣、考え方を知る調査手法）を用いて、人間について研究する。文化人類学の領域において、地球上の様々な文化を持つ集団内の価値観について多くの研究がなされている。本節では、文化人類学における価値観研究の中から、特に「ジェンダー」、「交換」、「民族」にまつわる

研究に注目し、紹介する。

２－２．ジェンダーと価値観

「ジェンダー」とは、文化的、社会的、心理的性差であり、生物学的な性や性別とは区別される。ジェンダーは社会が規定している性差であり、「男性らしさ」あるいは「女性らしさ」として求められる役割や振る舞いを指す。この背景には、その社会における男性らしさ、女性らしさ、その両者の関係性に対する見方、つまり価値観があると考えられる。

文化人類学の創成期に活躍した Mead は、1931 年から 33 年の間に調査したニューギニア島のモンドグモール族、チャンブリ族、アラペシュ族の３つの社会で、男女に求められる役割を検証した。Mead 自身はこの時に「ジェンダー」という言葉を用いていないが、ニューギニアの３つの地域で男性らしさと女性らしさとして求められるものが異なることを示している（Mead, 1935）。モンドグモール族は、マラリア蚊のはびこるセピック川の辺で生活し、半農半猟で生計を立てる。男女ともに攻撃的・積極的な性格で、子どもに対する養育態度は、男女ともに子どもに無関心である。チャンブリ族は、チャンブリ湖内の小島に住む。女性が主に漁労を営み、生活を支えている。そのため、女性は支配的な性格で男性は依存的な性格である。養育態度については、女性は授乳以外での子どもへの接触が少ない。アラペシュ族は、山岳地域に住み、焼畑農耕で生活する。競争の少ない社会であり、男女ともに穏やかな性格で、子どもの養育に強い関心を持つ。Mead のニューギニア島の３つの社会の研究は、あまりにも図式的であり、今日では Mead の読み違いであったという意見が主であるが、各民族の社会によって求められる男性らしさ、女性らしさ、その両者の関係性に対する価値観が異なり、子どもに対する養育態度にもそれらが表出していることを示唆している点で認められよう。

２－３．交換と価値観

文化人類学において「交換」を扱った最も有名な研究は、Malinowski によって紹介された「クラ（kula）」であろう（Malinowski, 1922 寺田・増田 1967）。クラは、トロブリアンド諸島などのニューギニアの東に広がる海域の島々に住む人々によって行われる円環状に結ばれた交換現象である。ムワリと呼ばれる白い貝の腕輪とソウラヴァと呼ばれる赤い貝の首飾りが、海を越えて交換される。クラを行うためには、大掛かりな遠洋航海が必要であり、命懸けで危険な冒険を成功させなければならない。命を懸けてクラを行うことは、現代社会の市場原理からは理解しづらい。しかし、危険を伴うクラに参加することは、その地域の人々にとっては英雄的な行為であり、経済的利益よりもそのことが大切であるという価値観があるのかもしれない。

クラと似た交換現象は、カナダの西海岸に住むネイティヴ・アメリカンの集団においても、「ポトラッチ（potlatch）」と呼ばれる形で存在することが Mauss（1954, 有地訳 1962）によって紹介されている。ポトラッチとは、子どもの誕生や首長の就任といった重要な儀式の際に、近隣部族を招いて大量に財を振舞う習慣のことである。ポトラッチにおいて重要視されるのは気前のよさであり、惜しみなく財を振舞うことで贈り手の威信が高まる。彼らにとっては、財を貯めることよりも、気前良く財を振舞うことが重要なことであり、

結果的にポトラッチを行った者の地位を安定させる。

クラもポトラッチも、現代社会の市場原理とは異なった価値体系の中で機能している。現代社会の市場では、提供した労力や金銭に見合ったものが返されることが原理の中心である。提供したものとその結果受け取るものとの価値が釣り合い取れることが、現代社会の価値観の一つであるのに対し、クラやポトラッチが行われる社会においては、見返りを求めず財を振舞うことが重要であるという価値観が存在している。財と財の交換という現象を取ってみても、その文化あるいは社会によって価値観が異なることがこれらの事例から窺えるであろう。

２－４．民族と価値観

広辞苑（第五版）によると、民族とは「文化の伝統を共有することによって歴史的に形成され、同属意識をもつ人々の集団」である。そして、民族は、社会生活の基本的な構成単位であるが、一定の地域内に住むとは限らず、複数の民族が共存する社会もあり、人種・国民の範囲とも必ずしも一致しない。民族という言葉は、英語では「ネイション（nation）」や「エスニック・グループ（ethnic group）」と表現されることがある。政治体制に基づいた国家集団の枠組みを強調する場合は前者、生活習慣や文化的特徴を強調する場合は後者が用いられているようである。本節では、エスニック・グループとしての民族とその研究の重要性について考える。

民族は、伝統的文化を背景とした心理的・社会的特性、アイデンティティを所有しており、それらは価値観として意識的・無意識的に表出される。これを「エスニシティ（ethnicity）」と呼ぶ。エスニシティは、外的・客観的条件により、形成されたり、顕在化したりする。たとえば、他民族や国家の勢力の存在などにより、その民族のエスニシティが脅威にさらされると、エスニシティが顕在化し、強く意識される。特に、現代社会において国家は最大の政治主体であり、ある国家に民族が存在するか否か、どれくらい存在するかは、その国家の判断・規定次第である。国家統治の面からすると、統治する人々があまりに多様であると、国家は困る。そのため、民族の特色をそぎ落とし、その代わりに同じ国の民という同朋意識を想像、創造しなければならない。その結果、民族は、エスニシティと国家の作り上げるアイデンティティとを所有することになり、時に両者の間で葛藤が生じる。この葛藤が民族紛争の根本であることも多い。伝統的文化に基づく民族の価値観と国家の価値観とが、その民族の人々の中でどのように認識されているのか、受け入れられているのかを研究することは、世界各地で民族紛争が勃発している現在強く望まれることであろう。

3.　心理学における価値観研究

３－１．心理学と価値観

心理学の分野においても、価値観は研究対象の一つとして扱われてきた。心理学では、価値観を個人のパーソナリティを形成する要因の一つと見なし、価値観を具体的な尺度項目によって測定することで、価値観の研究に寄与してきた。

価値観についての研究は、大きく「類型論的アプローチ」と「特性論的アプローチ」の２つに大別される。類型論的アプローチとは、価値観を何らかの理論ないし基準に基づいて類型化することで価値観を明らかにする方法である。これに対して、特性論的アプローチとは、価値観を複数の構成要素、すなわち特性の集まりとして捉える方法である。次節以降では、類型論的アプローチからの価値観研究と特性論的アプローチからの価値観研究を具体的に紹介する。

３－２．類型論的アプローチ

類型論的アプローチの代表的な価値観研究は、Spranger（1922）、Morris（1956）、見田（1966）の研究であろう。そこで、本節ではこれら３つの研究を取り上げる。

（１）Spranger の価値観研究

心理学の分野において、価値観を最も初めに類型化したのは、ドイツの心理学者である Spranger であろう。Spranger は、Dilthey の了解心理学を発展させ、人の基本的な生活領域を体系づける６種類の価値観類型を作り上げた（Spranger, 1922; 表１）。

Spranger の価値観類型は、Vernon & Allport（1931）によって尺度化された。そして、アメリカ人を対象に質問紙調査を実施し、「論理型」、「経済型」、「権力型」が男性には多く、「審美型」、「社会型」、「宗教型」が女性に多いことが示された。さらに、Vernon & Allport（1931）の尺度は、Allport, Vernon, & Linzey（1960）によって改良がされている。

表１　Spranger の６価値類型

類型	各類型の説明
論理型	合理的であることを重視、普遍的・客観的な事柄を尊重する
経済型	実際性・効用性・経済性を優先、最大限の利益を追求する
審美型	美と調和を重視、芸術的活動に情熱を傾ける
社会型	他者との関係を重視、他者への献身や愛によって自己の充実を感じる
権力型	権力の獲得に強い関心、他者を支配したり指導したりすることに喜びを感じる
宗教型	宗教的な活動や神秘的な体験に対して関心を持つ

（守﨑, 2003 より作成）

（２）Morris の価値観研究

価値観の内容について考察を加えたのが Morris である。Morris は、人々の生き方として表出する価値観を「13 の生き方（way of life）」として示した（Morris, 1956）。彼は、思想史上に現れた様々な生き方の倫理や哲学の内容分析から、その根底に３つの基本的構成要素（表２）があることを見出した。そして、これら３つの基本的構成要素の組み合わせから、７個の生き方を想定し、アメリカ人学生に示し、アメリカ人の理想の型を見つけ出そうと試みた。しかし、実際に調査を行ったところ、この７個の生き方に該当しないものが多く出てきた。そのため、新たに６個の生き方を加え、13 の生き方の類型を提案し、尺度化した。表３に Morris の 13 の生き方の類型を示す。

表２　Morris の３基本的構成要素

基本的構成要素	各基本的構成要素の説明
ディオニソス的要素	その時々の欲求のままに、思う存分行動すること
プロメテウス的要素	外界を支配・変革しようとして活動すること
ブッダ的要素	自己の欲求を抑制することで、心の安定を保つこと

（見田, 1966 より作成）

表３　Morris の 13 の生き方

生き方	各生き方の説明
中庸型	慎みと知性によって、秩序ある生活を行わなければならないと考える
達観型	他人や外的事物への依存を避け、自分自身の修養・解明、自己規制に集中する
慈愛型	他人に対する共感的な愛に意義に見出し、自分を抑え、他者に対しては思いやりを示す
享楽型	人生は楽しむためにあるとし、特定の人や事物に依存しない
協同型	社会集団にとけこみ、協力と友情のもと、共通の目標に向かって励む
努力型	人間の進歩のため、問題に不断の努力を持って立ち向かい、解決していく
多彩型	生き方の多様性を認め、生活の設計のために、様々な生き方を用いる
安楽型	生きていること自体を喜び、衣食住の充足と安定した人間関係を大切にする
受容型	受容性を人生の基調と考え、安らかな気持ちで待つことで、自我が養われ、人生が開けるとする
克己型	高い理想をしっかりと保持し、自我の手綱を握り、衝動を抑制し、理性によって行動する
瞑想型	外界との関係を断ち切り、自我の内面的育成に力を傾ける
行動型	身体的エネルギーを外に向け、積極的に行動する
奉仕型	質素・誠実・忠実・謙遜を重んじ、他者や社会の役に立つことを重視する

※ Morris（1956）は 13 の生き方に個別に名称をつけていない。見田（1966）が便宜的につけた名称を使用

Morris の価値観尺度は、13 の生き方を 100～150 語程度の文章にまとめたものを読み、それぞれの生き方の好悪を 7 段階で評定させ､最後に 13 の生き方の好意度を相対的にランクづけさせるというものである。Morris （1956）の価値観尺度は、異なる文化の中で生活する人々の価値観を調べるのに用いられてきた。たとえば、アメリカやカナダでは「多彩型」の生き方が最も好まれ、日本では「慈愛型」の生き方、インドでは「中庸型」、中国では「奉仕型」や「協同型」の生き方が好まれていた。

また、時系列による価値観の違いも報告されている。Morris の調査から 15 年後の 1964 年、Misumi & Ando（1964）は、日本人大学生を対象に Morris の価値観尺度を実施した。その結果、「慈愛型」の生き方が大きく減少し、「多彩型」の生き方が最も好まれるようになり、日本人の価値観がアメリカの価値観に近づいてきたと報告している。さらに、大山（1998）は、1995 年から 1997 年にかけて日本人大学生と一般成人を対象に Morris の価値

観尺度を用いた調査を実施した。その結果、日本人大学生の支持が高かった生き方は「享楽型（25.3%）」と「多彩型（19.5%）」の生き方であった。また、「安楽型」の生き方については、高い評価を与える者とそうでない者の差が大きかったものの、「安楽型」の生き方を自分が送りたいと思う人生のタイプとして選んだ者の割合は多かった（20.7%）。一方、一般成人を対象とした調査の結果では、「努力型（55.5%）」、「行動型（31.7%）」、「多彩型（30.5%）」、「中庸型（28.2%）」、「克己型（27.4%）」が望ましい生き方としての選択率が高かった。なお、一般成人を対象とした調査では、13 の生き方の中から望ましい生き方を３つまで選択する方法を取っている。この結果は、時代の変化と共に、調査対象者の生まれ育った年代の影響や、現在のライフステージや生活環境も価値観に影響を及ぼしていることを示していよう。

（３）見田の価値観研究

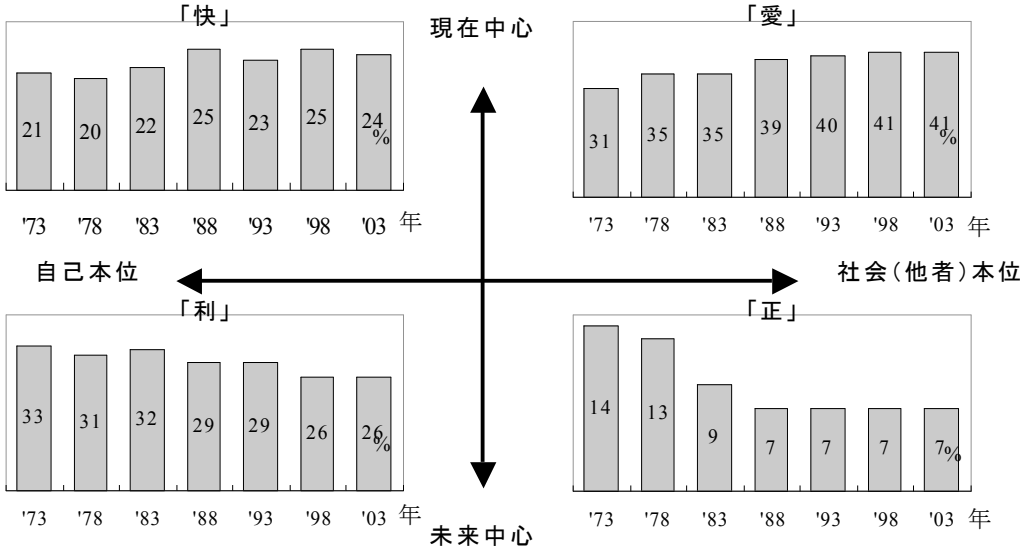
見田（1966）は、価値を「主体の欲求をみたす性質」と定義し、価値の機能から価値を分類した。価値判断のパースペクティヴの根源には、「現在」の感情のままに身を任せるか「未来」の諸結果に対する配慮からそれを抑制するかの「時間的パースペクティヴ」と、「自己」の利害を重視するか「社会（他者）」への影響への配慮からそれを抑制するかの「社会的パースペクティヴ」の２つがある。そしてこの２つの軸の組み合わせから、「快」、「利」、「愛」、「正」の４個の価値類型が導き出される（図１）。

		社会的パースペクティヴ	
		自己本位	社会（他者）本位
時間的パースペクティヴ	現在中心	「快」 その日その日を自由に楽しく過ごす	「愛」 身近な人たちと和やかな毎日を送る
	未来中心	「利」 しっかりと計画を立てて、豊かな生活を築く	「正」 みんなと力をあわせて、世の中を良くする

※ 「快」、「利」、「愛」、「正」の４個の価値類型の説明は、NHK 放送文化研究所（2004）の「日本人の意識」調査より引用

図１ 見田の価値類型

NHK 放送文化研究所は、1973 年から５年に一度の間隔で、16 歳以上の日本国民を対象に「日本人の意識」調査を行い、これまでに７回の調査を実施している。「日本人の意識」調査の中に、見田（1966）の価値類型に基づく４個の生活目標を選択する項目がある。1973 年の調査から直近に行われた 2003 年の調査までの、各生活目標の選択率の推移を見ると、「愛」に重きを置くタイプが増え、「利」と「正」に重きを置くタイプが減少していた（図２）。日本人が日々の生活で目標としている価値観が、豊かな生活を求めることから、身近な人たちと和やかな日々を送ることに移り変わっていることが示唆されよう。



（NHK 放送文化研究所, 2004 より作成）

図２　生活目標の選択率の推移

以上のように、価値観研究の類型論的アプローチは、複雑な価値観を類型化することで価値観を捉える枠組みを提供し、価値観研究に寄与してきた。また、生まれ育った地域の文化や年代、現在のライフステージや生活環境によって、主流となる価値観が異なることを、価値観尺度を作成・実施することで示している。

３－３．特性論的アプローチ

価値観を類型化して捉えようとするアプローチ以外にも、価値観を複数の構成要素、すなわち特性の集まりとして捉える特性論的アプローチもある。特性論的アプローチでは、価値観を構成する要素・特性を人々がどの程度重要視しているかを尺度で測定することにより、集団間の価値観の違いを検討する。本節では、特性論的アプローチの研究例として、Gordon（1960, 1967）、Hofstede（1980, 1983）、The Chinese Culture Connection（1987）を取り上げる。

（１）Gordon の価値観研究

個人と他者との人間関係に含まれる価値観について Gordon（1960）は検討し、６個の対人的価値を測定する尺度（Survey of Interpersonal Values; SIV）を開発した。６個の対人的価値を表４に示す。

ゴードン・菊池（1981）は、日本とアメリカの大学生と高校生に SIV を実施し、対人関係についての価値観の比較研究を行った。その結果、男子大学生と男子高校生においては、日本人の方がアメリカ人よりも「同調的」、「博愛的」価値を重視し、「承認的」、「独立的」、「指導的」価値を軽視する傾向があった。また、女子大学生と女子高校生においては、日本人の方がアメリカ人よりも「同調的」、「独立的」価値を重視し、「承認的」、「支持的」価

値を軽視する傾向があった。アメリカ人との比較の中で、日本人は全般的に、他者から尊敬されたり賞賛されたりすることよりも、社会的な規範に従うことで、他者や社会から受容されることを重視する価値観を持っていると言えよう。

表４　Gordon の対人的価値

対人的価値	各対人的価値の説明
支持的	他の人々から理解を持って扱われ、勇気づけられる。親切や思いやりを持って扱われる
同調的	きちんとした規則に従い、社会的な道理に適った行動をする。他の人々から受け入れられるような妥当な行動をする
承認的	他の人々から尊敬や賞賛を受け、重要な人物として考えられる。他の人々の好ましい注意をひき、承認を受ける
独立的	自分の思うように行動する権利を持つ。自分自身の決定を自由にする。自分独自のやり方で行動する
博愛的	他の人々のためになることをする。共に分けあい、不幸な人や困っている人々に助力の手を差し伸べる
指導的	他の人々の行動に責任を持つ。グループをリードし、他の人々の上に立つ。リーダーとしての地位に就く

（ゴードン・菊池, 1975 より作成）

また、Gordon（1967）は、非対人的環境で６個の個人的価値のどれを相対的に重視するかを測定する尺度（Survey of Personal Values; SPV）も開発した。６個の個人的価値を表５に示す。

表５　Gordon の個人的価値

個人的価値	各対人的価値の説明
実際的	自分の所有物に注意を払ったり、自分のお金を費やした分は必ず手に入れる。十分にペイのすることだけを行う
達成的	困難な仕事にチャレンジする。自分の仕事について高い水準を望む。際立ったやり方で仕事を片づける
多様的	これまで行ったことのない事を行う。様々な経験をする。多少危険でもスリルのあることを行う
決定的	速やかに決定を下し、いつも話しがポイントをつく。明確で強固な信念を持っている
秩序的	仕事を組織立てて行い、計画的な生活を送る
目標志向的	仕事の明確な目標を持ち、それを目指して努力する。計画的な生活を送る

（ゴードン・菊池, 1975 より作成）

ゴードン・菊池（1975）は、日本とアメリカの大学生と高校生にSPVを実施し、個人的価値観の比較研究を行った。その結果、日本人の大学生と高校生は、アメリカ人の大学生と高校生に比べて、「秩序的」、「目標志向的」価値を重視し、「実際的」、「達成的」、「多様的」価値を軽視する傾向があった。日本人は、明確な目標のもと、組織立った仕事を行うことを重視する価値観を持っており、一方、アメリカ人は、これまで経験したことのないことに積極的に取り組むことを重視する価値観を持っていると考えられる。

（２）Hofstedeの価値観研究

Hofstede（1980, 1983）は、1968年から1972年までの間に、50ヶ国と３地域（アラブ、西アフリカ、東アフリカ）で働く約12万人のIBM社員からデータを集め、仕事に対する文化的価値次元を４個挙げている（表６）。

表６　Hofstedeの仕事に関する価値次元

仕事に関する価値次元	各価値次元の説明
権力格差	それぞれの国の制度や組織において、権力の弱い成員が、権力が不平等に分布している状況を予期し、受け入れている程度
不確実性回避	ある文化の成員が不確実な状況や未知の状況に対して脅威を感じる程度
個人主義／集団主義	個人と個人、個人と集団のつながりの強さ、弱さを示す度合い 個人主義：個人と個人との結びつきはゆるやか 集団主義：集団内での個人と個人の結びつきは強い
男性的価値／女性的価値	生物学的ではなく、社会・文化的に規定された性的役割の度合 男性的価値：社会生活上で男女の役割が明確に分かれている 女性的価値：社会生活上で男女の役割が重なり合っている

※　「個人主義／集団主義」、「男性的価値／女性的価値」については、得点が高いほど「個人主義」、「男性的価値」が強いように得点化

（Hofstede, 1991 岩井・岩井 1995より作成）

Hofstede（1980, 1983）は、50ヶ国と３地域における４個の価値次元のスコアを算出し、順位づけを行った。その結果、アメリカは「個人主義」が非常に高く（１／53位）、「男性的価値」がやや高い（15／53 位）が、「権力格差」と「不確実性回避」についてはやや低かった（38／53位; 43／53位）。一方、日本では「男性的価値」が非常に高く（１／53位）、「不確実性回避」も高い（7／53位）が、「権力格差」と「個人主義」は中程度であった（33／53 位; 22／53 位）。職業場面において、日本は、決まった枠組みの中で作業を行うことを好み、革新的なアイデアを避ける傾向があることが窺える。また、職業場面における男女の不平等が残っていることも示していよう。しかし、Hofstede（1980, 1983）の調査結果は今から20年以上前のものであり、現在の仕事に対する文化的価値観を映し出しているとは必ずしも言えないであろう。

（３）The Chinese Culture Connectionの価値観研究

Hofstede（1980, 1983）の研究は、50ヶ国と3地域の約12万人を対象とした、非常に規模の大きい調査であった。しかし、その対象となったのはアメリカの大企業であるIBMの社員であり、対象国、及び地域の人々の価値観よりもアメリカ的な価値観を強く持っていた可能性がある。そこで、The Chinese Culture Connection（1987）は、Hofstedeの仕事に対する4個の文化的価値次元が異なった文化的伝統を持つ国においても適用可能であるかを、中国の伝統的文化の観点から見直した。

まず、中国人社会科学者によって挙げられた「中国人にとって根源的で基本的な価値」を33個にまとめ、さらにThe Chinese Culture Connectionの判断で7個の価値を加え、40の価値項目を選択した。そして、40 の価値項目が個人的にどの程度重要であるかを、22ヶ国（香港、台湾、日本、韓国、フィリピン、タイ、シンガポール、インド、バングラディシュ、パキスタン、オランダ、スウェーデン、ポーランド、西ドイツ、イギリス、ナイジェリア、ジンバブエ、カナダ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、ブラジル）の大学生に評定を求めた。

その結果、広く統合的で社会的に安定することを強調する「統合・調整的」価値観、年功序列や恥の感覚といった儒教的な労働倫理を反映している「儒教的」価値観、優しさや寛大さを重視する「人間的心情」価値観、道徳的な自己抑制を重視し打算的なものを避ける「道徳的規律」価値観の4個の価値観が得られた。そして、得られた4個の価値観とHofstedeの仕事に対する4個の文化的価値次元との相関分析を行ったところ、「統合・調整的」価値観と「個人主義」、「権力格差」とに負の相関が認められた。また、「道徳的規律」価値観と「権力格差」との間に正の相関、「個人主義」との間に負の相関が、「人間的心情」価値観と「男性的価値」との間に正の相関が認められた。しかし、「儒教的」価値観は、Hofstedeの仕事に対する4個の文化的価値次元のいずれとも相関が認められなかった。このことは、欧米文化の価値観に基づく抽出できない東洋的価値観が存在することを示唆していよう。

価値観研究の特性論的アプローチは、価値観を構成する要素に分解することによって、国家間での価値観の違いをより具体的に検証することを可能にしてきた。また、The Chinese Culture Connection（1987）の研究にあるように、価値観を構成する要素がそもそも文化間で異なる可能性を示唆した点で意義が認められるであろう。

特に、東洋と欧米の文化における価値観の違いは、その後、文化心理学の観点から注目を浴びることとなった。Markus & Kitayama（1991）は、文化的に共有された自己観の性質を体系的に分析するために、欧米文化で優勢な「相互独立的」自己観と東洋文化で優勢な「相互協調的」自己観を区別した。これらの自己観は、個人がそれを受け入れたり、拒否したりする価値観としてあるだけでなく、文化的慣習・ルーティン化されたスクリプト、儀礼的行為、社会的制度など、各文化にある日常的現実を構成する（北山, 1998）。相互独立的自己観では、自己は他の人々や周囲の物事とは区別された単一の自由な主体である。そのため、個性に価値を置き、自分の中に望ましい属性を見出し、それを外に表現するこ

とが重要視される。相互協調的自己観では、自己とは他の人々や周囲の物事と結びついた関係の中にあるものと見なされる。そのため、意味のある社会関係を見出し、自分をその中で重要な役割を持った存在であると認識することやそのように周りから認識されることが重要となってくる。また、Nisbett（2003, 村本訳 2004）は、相互独立的な文化と相互協調的な文化では、物事の見方・認識の仕方自体が異なると述べている。相互協調的文化では、出来事は相互に関連しあっていると考え、世界を関係によって捉える傾向がある。一方、相互独立的文化では、人々は、物事を周囲の文脈から切り離して捉え、それがどのような属性を持ち、どのようなカテゴリに属するのかに注意を向ける。このような物事の見方・認識の仕方が、人間関係を強調し、調和を重んじる東洋の価値観や個々の独立性に注目する西欧の価値観を形作るのかもしれない。

4.　価値観の国際比較

４－１　国家間、民族間での価値観の違い

これまでに述べてきたように、どのような価値観を人々が持っているかは、その人々の文化的背景によって異なる。文化人類学における価値観研究も心理学における価値観研究も、価値観が国家間、民族間で異なること、そしてまた時代や生まれ育った年代によっても異なることを示している。本節では、価値観の国家間での違いとその時系列的変化を扱った「世界価値観調査」と、国家内での民族による価値観の異同を扱ったマレーシアにおける「アジア世論調査」について説明する。

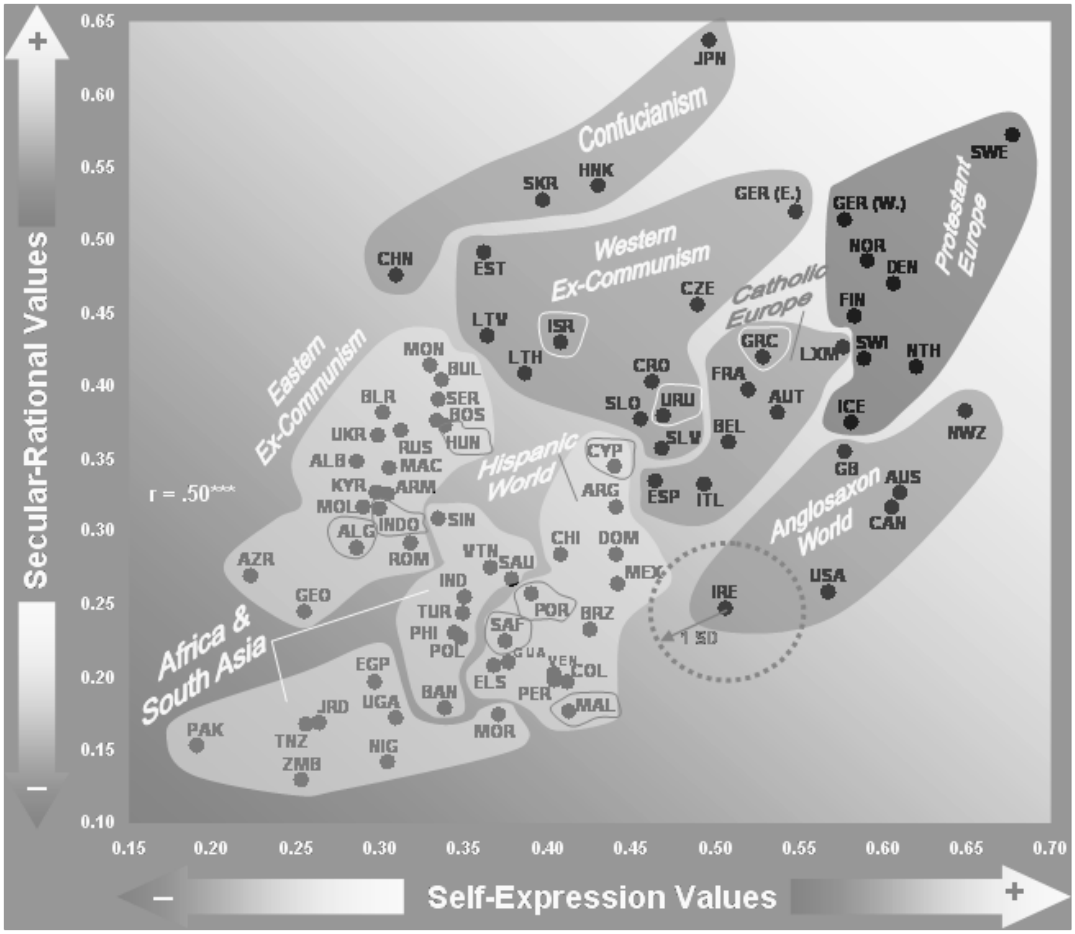
４－２．世界価値観調査

「世界価値観調査」はミシガン大学の Inglehart が中心となり、世界各国・地域の研究機関に呼びかけて実現した国際プロジェクトである。1981 年からおよそ５年ごとに、世界各国・地域の政治観、経済観、労働観、教育観、宗教観、家族観、環境観の調査を行っている。調査はこれまで、1981 年、1990 年、1995 年、2000 年、2005 年と５回にわたり実施されている。

世界価値観調査のこれまでの結果は、世界各国の人々の価値観は「非宗教的・合理的価値（Secular-Rational Values)」と「自己表出的価値（Self-Expressive Values)」の２つに要約できることを示している（World Values Survey, 2006)。「非宗教的・合理的価値」は、社会における宗教の重要性の度合いを示す。「非宗教的・合理的価値」の低い社会は、宗教の影響が強く、伝統的慣習が残っている社会であり、「非宗教的・合理的価値」の高い社会は、宗教の影響が弱く、合理性の原理が強い社会である。また、「非宗教的・合理的価値」の低い社会では、親子関係の重視、目上の人に対する尊敬、離婚・妊娠中絶・安楽死・自殺の否定などの特徴や、高い愛国心、ナショナリズムが見られる。「非宗教的・合理的価値」の高い社会では、全く逆の特徴が見られる。「自己表出的価値」は、物質主義と脱物質主義を分ける軸である。「自己表出的価値」が低い社会では、国内秩序の維持や経済の安定が重視される。一方、「自己表出的価値」が高い社会では、言論の自由や国民の政治関与の増大といった課題が重視される。また、環境保護の重視、多様性の受容、子どもの養育態度にお

ける想像性と受容性の重視といった特徴も見られる。

図３の Inglehart-Welzel の世界価値観マップは、2006 年 11 月の時点で回収済の 2005 年調査の各国データの結果を「非宗教的・合理的価値」と「自己表出的価値」の２次元上にマッピングしたものである。高度に産業化が進んだ先進国は、「非宗教的・合理的価値」と「自己表出的価値」の両者が高い領域に位置し、産業が未発達の発展途上国は、「非宗教的・合理的価値」と「自己表出的価値」の両者が低い領域に位置した（World Values Survey, 2006）。Inglehart（1990）は、産業の発達が身体的安全と経済的発展をもたらし、物質主義から脱物質主義へ価値観を移行させると指摘しており、World Values Survey（2006）の結果はそれを裏づけるものであった。



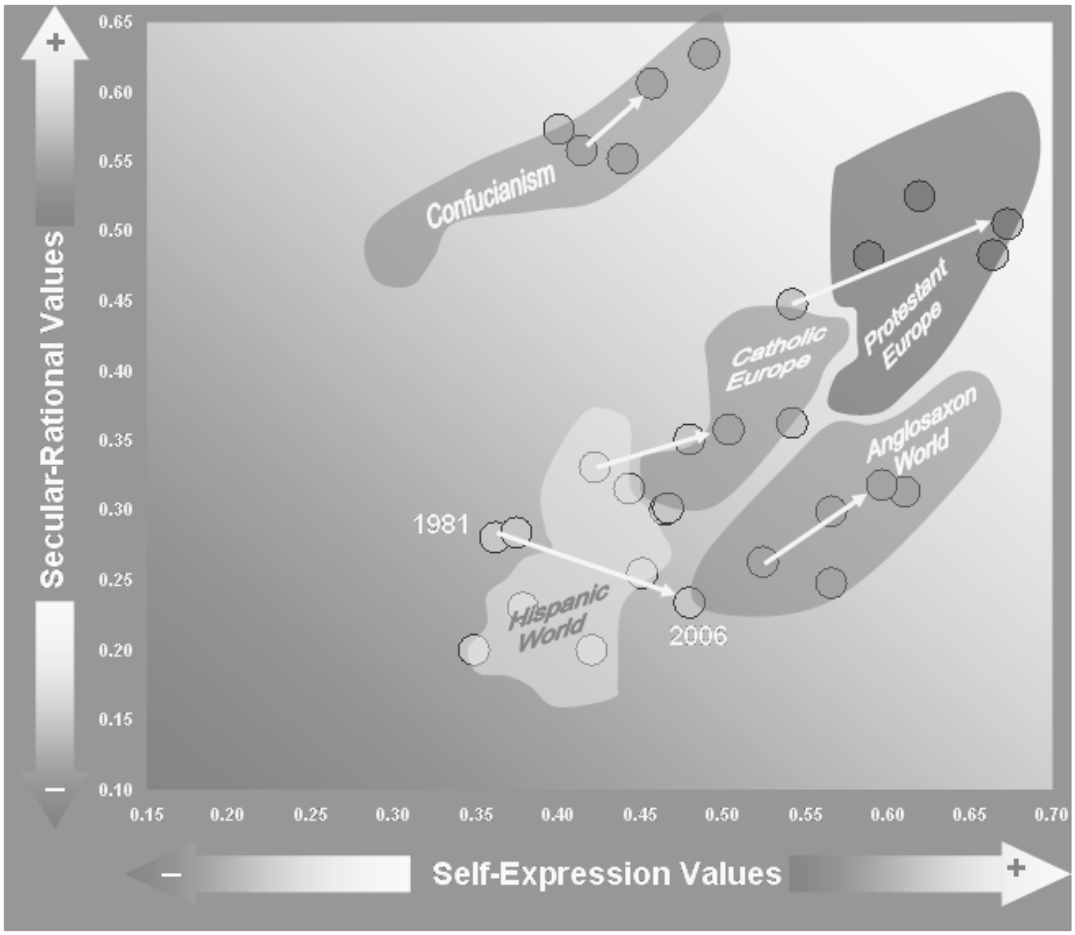
（典拠：http://www.worldvaluessurvey.org/）

図３　Inglehart-Welzel の世界価値観マップ（2005 年調査）

また、1981 年から 2005 年までの５回の世界価値観調査で得られたデータから、５個の文化ゾーンの価値観が、調査の回を重ねるごとにどのように変容したかを示したのが図４である。分析の対象となったのは、５回全ての調査が実施された文化ゾーンであり、「プロテスタント・ヨーロッパ（Protestant Europe）」、「カトリック・ヨーロッパ（Catholic Europe）」、

「アングロサクソン系（Anglosaxon World)」、「ヒスパニック系（Hispanic World)」、「儒教的（Confucianism)」である。いずれの文化ゾーンにおいても、1981 年の調査と比べて 2005 年の調査では、「自己表出的価値」が高くなっていた。また、「ヒスパニック系（Hispanic World)」を除いた 4 個の文化ゾーンでは、「非宗教的・合理的価値」が若干高くなっていた（World Values Survey, 2006)。

世界価値観調査は、その社会の産業構造の変化が「物質主義－脱物質主義」の次元での価値観に影響を与えることを示唆していよう。



（典拠：http://www.worldvaluessurvey.org/）

図４　文化ゾーンごとの価値観の時系列的変化（1981～2005 年調査）

４－３．多民族国家マレーシアの価値観

２章４節でも述べたように、国家の枠組みと民族の枠組みは必ずしも一致しない。したがって､国家間での価値観の違いのみならず､民族間においても価値観の違いは存在する。本節では、一つの国家における民族間での価値観の類似点と共通点を、多民族国家であるマレーシアにおける「アジア世論調査」の結果（サラバナムッチュ, 2005）から紹介する。

マレーシアの人口は約 2,500 万であり、マレー人が人口の約 60%を占め、続いて中国系

が約 28%、インド系が約 8%を占めている。言葉と文化の違いに加え、宗教による違いも見られ、マレー人はイスラム教徒、中国系は仏教徒と道教徒が主流であり、インド系はヒンズー教徒および少数のイスラム教徒、シク教徒で構成されている。マレーシアは 1957 年のマラヤ連邦独立後、多文化独立国家となった。現在は民族間の対立は収まっているが、1980 年代まで民族間の紛争が途絶えず、1969 年の総選挙後には、大規模な民族抗争による暴動事件（５・13 事件）も起きた。

アジア世論調査は、2003 年 7 月にマレーシアで実施された。調査対象はマレーシア半島の 11 州および 1 連邦直轄区の 800 人のマレーシア人である。調査対象となった 800 人のマレーシア人の国家アイデンティティは、圧倒的多数が「マレーシア人（91.9%）」であった。しかし、民族アイデンティティ（サラバナムッチュ（2005）では「下位国家アイデンティティ」と表記）は、「マレー人（44.5%）」、「中国系（21.8%）」、「インド系（8.0%）」であった。民族ごとに、様々なテーマに対する価値観についての回答パターンを見てみると、「生活満足感」、「社会的態度」に対しては民族で差は見られなかった。「総合的に考えて、あなたは近頃幸せだと思いますか」という質問に対しては、全体の 76.2%が「非常に幸せ」もしくは「どちらかというと幸せ」と回答しており、インド系は若干満足度が低い傾向にある（68.6%）が、それほど大きな差は認められなかった。社会的態度については、全体的に自分たちを民主主義者であると信じており、人権、表現の自由などが重要問題であると感じているが、行動を起こすかどうか、あるいは政府が民主主義の実践に妥当な配慮をしないことを批判するかどうかとなると、やや保守的となる傾向が見られた。これらに民族による差は見られなかった。

民族よる違いが認められたのは、「政府への信頼」、「軍隊への信頼」、「マスコミへの信頼」、「宗教団体への信頼」である。政府への信頼は、マレー人が一番高く、57.6%が「非常に」信頼感を持っているのに対し、中国系は信頼感を持っていないと回答した者が 13.5%とやや高い。軍隊への信頼に関してはマレー人が一番高く、64.5%が「非常に」信頼感を持ち、信頼感を持っていないのが 3.5%に過ぎないのに対し、中国系は信頼感を持っていないと回答した者が 23.8%と高かった。一方、マスコミに対する信頼感では、マレー人のマスコミ不信が 30.2%と高く、中国系は 24.6%とそれより低く、インド系は信頼率が 88.3%と最も信頼していた。逆に、宗教団体に関しては、マレー人は一番信頼しており、不信感を示しているのはごく少数の 2.6%のみであった。逆に嫌悪する中国系の数は 21.9%、インド系は 10%と中間に位置していた。

マレーシア人の社会生活と政治は、多文化社会に深く根ざしたものとこれまで考えられてきた。しかし、2003 年に行われたアジア世論調査の結果は、民族や宗教の範疇を超えて物質主義的価値観とミドルクラスであることの自負が見られた。各機関に対する信頼感においては、民族により若干の違いが認められたものの、全般的には政府や軍隊といった国家機関に対しては高い信頼感を示した。ミドルクラスの隆盛および、今後のグローバル化しつつある社会と経済環境においては、文化的制約があるにもかかわらず、市民社会が政治的共存基礎となりつるあることを示していよう。

今回取り上げたマレーシアの事例では、経済発展に伴い、それまで悩まされていた民族紛争の深い文化的亀裂や緊張関係は消失したように見られる。しかし、マレーシアのよう

に、民族間の対立が落ち着いた国ばかりでなく、未だ民族間で激しく対立する国も多い。２章４節でも述べたように、国家の枠組みと民族の枠組みは必ずしも一致しない。その中で、人々が国家の価値観と民族の価値観とをどのように折り合いづけていくのか、また、国家と民族との価値観の折り合いに、経済変化や産業変化がどのような影響を与えるのかを明らかにすることが望まれる。しかし、そういった国々においては、調査を実施すること自体に困難が伴うという問題もある。

5.　東アジアの価値観

５－１．東アジア価値観調査に見られる日本人の価値観

「東アジア価値観調査」は、統計数理研究所の国際比較調査グループによって実施された。東アジア価値観調査の対象国・地域は、日本（2002 年）、中国（北京・上海・香港; 2002 年）、台湾（2003 年）、韓国（2003 年）、シンガポール（2004 年）である（吉野, 2004a, 2004b, 2005a, 2005b, 2005c）。東アジア価値観調査と並行して、同調査の北京と上海で使用したものと同一の調査票を用いて、2003 年に中国の杭州と昆明でも調査が実施された（鄭, 2005a）。本章では、この東アジア価値観調査（2003 年の杭州・昆明調査を含む）から明らかにされた東アジア諸国の価値観を眺め、比較し、そこから浮かび上がる日本人の価値観について述べる。その際、特に「義理人情」をめぐる価値観、「儒教的」価値観、「自然・環境」についての価値観を取り上げ、それらの価値観が国家間でどのように違い、またその違いに影響していると考えられる要因は何であるかについて言及する。

５－２．義理人情

欧米との比較の中で注目される東アジアの特徴の一つに「義理人情」がある。自分を助けてくれた恩人に対する義理人情の感覚は、現在においても東アジア諸国で一般的に見られる価値観なのであろうか？また、日本における義理人情の感覚は他の東アジア諸国と異なるのであろうか？このことについて、角田・鈴木（2006）は、東アジア価値観調査と 2003 年に台湾と韓国で実施された「医療と文化調査（山岡, 2005）」の結果から検討した。

表７は、入社試験において「一番の人」と「親戚の人」のどちらを採用するか、「一番の人」と「恩人の子」のどちらを採用するかという項目についての回答分布を示したものである（表７）。林・吉野・鈴木・林・釜野・三宅・村上・佐々木（1998）の「国民性七か国比較」の結果と比べると、東アジア諸国では、「恩人の子」の選択率と「親戚の人」の選択率との間に差があり、自分を助けてくれた恩人に対する義理人情の感覚が見られた。恩人に対する義理人情の感覚は、日本人の特徴というよりも東アジア諸国の人々の特徴と言えよう。

表７　「入社試験においてどちらを採用するか」回答分布（%）

	日本	北京	上海	昆明	杭州	香港	台湾	韓国	ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ
一番の人	67.3	79.2	79.0	70.9	60.2	66.2	70.4	77.3	73.5
親戚の人	18.8	15.9	18.7	17.7	23.5	30.5	20.6	19.5	18.0
一番の人	44.1	59.3	54.4	57.4	47.4	46.7	52.9	55.2	53.3
恩人の子	39.9	35.7	43.2	30.6	37.2	48.4	38.4	41.1	36.5

	日本 (1988)	ｲﾀﾘｱ (1992)	ﾌﾗﾝｽ (1987)	西ﾄﾞｲﾂ (1987)	ｵﾗﾝﾀﾞ (1993)	ｲｷﾞﾘｽ (1987)	ｱﾒﾘｶ (1988)
一番の人	60.4	67.3	58.8	44.5	60.6	72.6	65.9
親戚の人	22.8	24.7	34.9	39.8	28.5	21.3	29.5
一番の人	40.6	62.9	50.2	36.2	68.2	68.6	64.9
恩人の子	42.3	27.6	43.2	46.9	19.4	23.9	30.4

※1 下段は林他(1998)の結果
※2「その他」、「わからない」については省略

（角田・鈴木, 2006 より作成）

５－３．儒教的価値観

儒教は、中国、朝鮮半島、日本などのアジア諸国の人々の価値観やライフスタイルの形成に大きな役割を果たしてきた。しかし、儒教の思想はそのまま伝えられていくのではなく、受け入れられた社会の文化やあるいは時代の影響を受けながら変容し、東アジアの各国でそれぞれ独自の価値観として息づいている。鄭（2005b）は、東アジア価値観調査の結果（シンガポール調査を除く）を、東アジア諸国に根づく儒教的価値観の変遷の視点から論じている。

鄭（2005b）は、社会変化と人々の生活の質の変化により、意識の近代化、合理化が求められるようになったとともに、東アジア諸国の人々の儒教思想を中心とする伝統的な価値観も変わりつつあると考えた。そして、7 個の伝統的な儒教的価値観に関する項目を設け、それぞれに「全くそのとおりだと思う」、「そう思う」、「そうは思わない」、「決してそうは思わない」の内一つを選ぶよう回答を求めた。表８は、国家・地域別の肯定的回答（「全くそのとおりだと思う」＋「そう思う」）の選択率を示したものである。

「先祖を尊ぶべき」は全ての国家・地域で高い肯定率が示されたが、残り６項目については大きな差異が見られた。「長男は両親の面倒を見るべき」という価値観は、日本（31%）と韓国（45%）では低いが、他では 50%を超えており、中国本土、香港、台湾では長男の家族に対する社会的責任が重視される価値観が根強く示された。また、「妻は夫に従う」、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべき」については、中国本土に比べ、台湾（55%, 46%）、韓国（64%, 35%）、香港（40%, 25%）、日本（32%, 23%）の肯定率が高く、家庭での男性優位の意識の強さが窺える。「親が反対する結婚はしない」も、韓国（32%）が最も肯定率が高く、日本（22%）、台湾（18%）がそれに続いた。「年上の人の意見に従う」、「家系を続かせるために息子は必要だ」という価値観は、台湾（67%, 53%）、韓国（62%, 41%）で高かった。このように、香港、台湾、日本、韓国に比べ、中国本土では儒教的価値観を重視する者の割合が小さく、政治・社会的変動にともなう中国人の伝統的な儒教的価値観の変

容が見られる。

表８　儒教的価値観項目の回答分布（「全くそのとおりだと思う」＋「そう思う」／%）

項目内容	日本	北京	上海	昆明
先祖を尊ぶべき	92	96	97	93
長男は両親の面倒を見るべき	31	50	51	51
妻は夫に従う	32	12	11	15
親が反対する結婚はしない	22	3	6	5
年上の人の意見に従う	43	37	40	30
家系を続かせるため息子は必要だ	28	15	11	15
男性は外で働き、女性は家庭を守るべき	23	12	14	16
項目内容	杭州	香港	台湾	韓国
先祖を尊ぶべき	94	97	100	88
長男は両親の面倒を見るべき	59	64	67	45
妻は夫に従う	14	40	55	64
親が反対する結婚はしない	6	7	18	32
年上の人の意見に従う	32	49	67	62
家系を続かせるため息子は必要だ	17	30	53	41
男性は外で働き、女性は家庭を守るべき	12	25	46	35

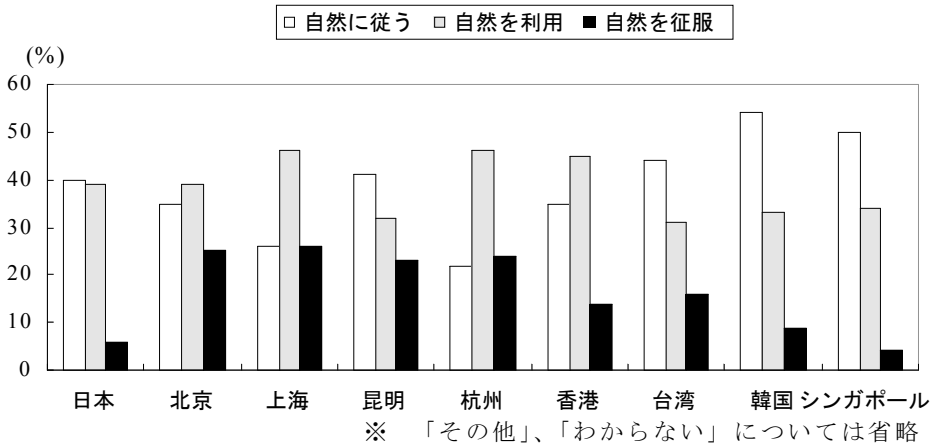
（鄭, 2005b より作成）

中国本土に比べて、香港、台湾、韓国、日本が伝統的な儒教的価値観をより強く守ってきていることは、経済発展や生活の質の向上がこれらの価値観にそれほど大きな影響を及ぼさないことを示していよう。一方、中国本土で儒教的価値観が衰退してきたのは、中華人民共和国建国直後の 1950 年代後半から 1980 年代半ばまでの間に連続して起きた「反右派闘争」、「鎮圧反革命運動」、「文化大革命」などの一連の政治的な災禍によるものであると、鄭（2005b）は指摘している。儒教的価値観について言えば、経済発展や物資的な豊かさよりも、社会改革や政治変動の影響を強く受ける可能性が示唆される。

５－４．自然観と環境観

現在地球上で問題となっている環境問題を解決するために、国際協調的な対応策を取ることが求められている。しかし、地球上の人々は、それぞれ異なる文化背景、政治制度、経済体系を持つ社会集団に属しており、環境･自然に対する認識や価値観も異なっている。人々の多様な環境意識や各国の利害関係を互いに理解した上での国際協調が必要であろう。このような問題意識のもと、鄭・吉野・村上（2006）は、東アジア価値観調査で用いた項目のデータを分析することで、東アジア諸国の人々の環境観と自然観を検討している。

自然と人間との関係について「人間が幸福になるためには、自然に従わなければならない」、「人間が幸福になるためには、自然を利用しなければならない」、「人間が幸福になるためには、自然を征服していかなければならない」のどの意見が真実に近いと思うかという設問についての回答分布を図５に示す。「自然に従う」の選択率は、韓国が最も高く、杭州が最も低かった。韓国に次いで、シンガポール、台湾、日本、香港が高くなっていた。「自然を利用」の割合は、大きな差は無かった。「自然を征服」の割合は、日本、韓国、シンガポールが 10%以下であるのに対し、中国本土、台湾、香港での選択率は高かった。つまり、中国人は、日本人や韓国人、シンガポール人と比べると、人間と自然との関係において、人間は自然を征服していかなければならないという自然観を持っていた。



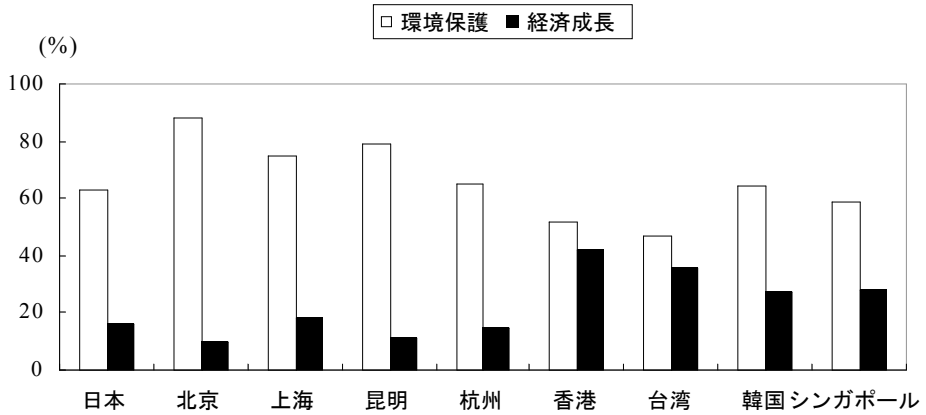
※　「その他」、「わからない」については省略

（鄭他, 2006 より作成）

図５　人間と自然の関係に関する回答分布（%）

また、環境保護と経済成長のどちらを優先するべきかという項目については、中国本土では、約８割の回答者が「環境保護を経済成長より優先」に賛成を示した。日本、韓国、シンガポールでもいずれも６割以上が環境保護を選択していたが、香港と台湾においては、環境保護と経済成長の選択率がほぼ同程度であった（図６）。

これらの結果から、鄭他（2006）は、各国の経済状況が自然や環境に対する価値観に影響を与える可能性を示唆している。経済的に発展している日本、韓国、シンガポールでは、環境保護に注目が集まり、人間と自然との関係は人間が自然に従うものであるという意識に転向してきている。これに対して、産業活動が比較的進んでいる香港と台湾では、環境保護も重視されているものの、他の地域と比べると経済活動を重視する傾向があった。特に、香港では、自然は利用するものであるという価値観が強く、自然を利用してより経済を発展させていこうとする意識が窺える。また、高度経済成長が続いている中国本土では、自然を征服するという考えが比較的強くある。中国本土では、現在厳しい環境問題が生じている。それが、人間が自然をコントロールすることにより、環境問題を克服していかなければならないという意識を強めているとも考えられる。



※　「その他」、「わからない」については省略

（鄭他, 2006 より作成）

図６　環境保護と経済成長に関する回答分布（%）

6.　価値観研究のこれから

６－１．価値観研究の問題点

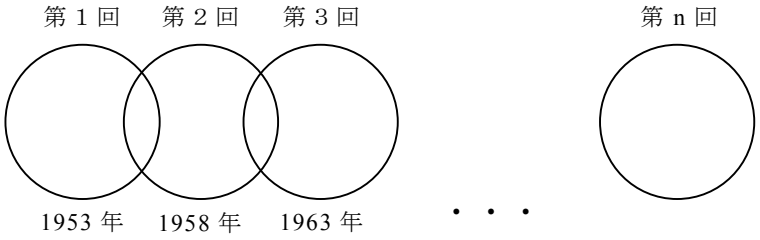
これまで、文化人類学および心理学における価値観研究を概観し、価値観が文化によりどのように異なるか、また時代背景や社会構造、経済構造によってどのように変容するかについて述べてきた。価値観研究は、地球上に生きる人々、集団の価値観がいかに多様で複雑なものであるかを明らかにしてきた。それゆえ、価値観を研究することは意味があるものであるが、一方で価値観を研究する難しさも浮かび上がってくる。背景となる文化が異なる地域の価値観を、包括的に捉えることがそもそも可能なのであろうか。この価値観研究が含有する問題点に対して、一つの提案をしているのが、吉野（2005d）の文化多様体解析（Cultural Manifold Analysis; CULMAN）である。

６－２．文化多様体解析

吉野（2005d）は、初めから全く異なる国々を比較しても、意識調査では計量的に意味のある比較はできないと指摘している。統計的に比較を行うには、言語や民族の源などの何らかの重要な共通点がある国々を比較し、似ている点と異なる点を判明させることが必要となってくる。その上で、重要な共通点で結ばれた連鎖を拡大していくことで、大規模な国際比較調査が可能となろう。

吉野（2005d）によって提案された文化多様体解析（Cultural Manifold Analysis; CULMAN）は、以上の前提に基づき、国際比較を行う上で必要な連鎖の種類を示したものである。CULMAN では「時系列的連鎖」、「空間的連鎖」、「項目の連鎖」に注目する。「時系列的連鎖」では、調査を単発で行うのではなく、調査を複数回にわたり継続的に行うことによって、各回の調査（時間の局所チャート）を少しずつ重複させながら、全体として長期の時系列調査を構成することを目指す（図７）。その際、各時代の調査に対応する調査票の項目

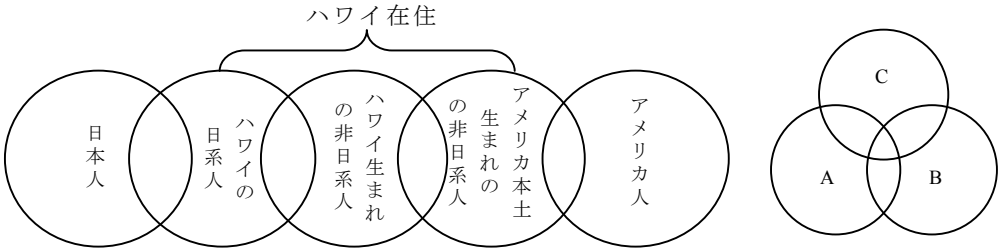
を時代とともに少しずつ修正、または新項目に入れ替えていく必要がある。そして、比較の連続性を保障するために、ある期間は古い尺度と新たな尺度とを併用して対象を計測し、双方の尺度の一致性や連続性、また必要であれば変換式などを考察し、それが明確になった時点で新たな尺度へ移行する。



（吉野, 2005d より作成）

図７　時系列的連鎖

「空間的連鎖」では、各調査は特定の国家、地域、社会集団をカバーしながら、連鎖をなす（図８）。文化・歴史・人種や民族等の重要な属性において、ある程度の共通性が想定される国々や集団間（場所の局所チャート）の比較の連鎖をはじめとして、徐々にその連鎖を拡大させていくことにより、グローバルな世界的比較が可能となる。



(a) 1 次元的連鎖　　(b) 2 次元的連鎖

（吉野, 2005d より作成）

図８　空間的連鎖

そして、時系列的調査では、質問項目の表現や内容の共通性をある程度保ちながら、必要に応じて少しずつ古い項目と新しい項目を入れ替えていく。また、国際調査の場合、同じテーマについて調査するとしても、文化背景の違いから、欧米諸国では意味のある項目が東アジア諸国では意味のないものとなることがあろう。調査対象となる地域に特有の項目とそうでない項目を区別し、ある特定の時代（期間）の比較対象となる国々や社会の集合に応じた適切な尺度（調査項目群; 項目局所チャート）を構成する必要があり、これが「項目の連鎖」である。

上記の３つの連鎖におけるチャートが、場合によっては重複し、包含関係を見せることで、文化の多様体が構成されると CULMAN では考える。これらの構造において、チャートの重複がうまく接続されることが連鎖の拡張の条件となる。例えば、時系列調査では、

調査項目群において、尺度としての連続性が保障されること、国際比較調査では２調査で鍵となる共通の地域･国家が含まれ､それらが矛盾のない回答パターンを示すことである。このような観点から価値観調査を構成することによって、調査対象となる地域の文化の多様性を考慮することができよう。

６－３．結び

国際化の進む現在､異なった価値観を持つ人々や集団同士が接触する機会が増えている。これまでの価値観研究が明らかにしてきたように、地球上に生きる人々、集団の価値観は多様であり、それゆえ価値観同士が衝突し合うことも少なくない。国家あるいは民族間での価値観の相違は、地球上のいたるところで衝突と紛争を引き起こしている。そういった中で、地球上には多様な価値観が存在することを認識する必要性が益々高まってきていよう。

国家間や民族間の紛争の問題のみならず、人口増加、大気の汚染や河川の汚濁、自然資源の破壊、都市環境の悪化と貧困といった問題の根底にも価値観がある。分離脳の研究でノーベル生理学・医学賞を受賞した Sperry は自著の中で次のように述べている。「社会問題としては、価値観が、地球上の貧困とか、汚染とか、エネルギーとか、人口過剰のような現実的な問題点の格付けをするが、こういう具体的な問題はすべて人為的なもので、価値観の産物そのものである。さらに、根底に含まれている価値観に適応性のある変化が起こらない限り、それはどんなに長期間かけても矯正されることはない（Sperry, 1983 須田・足立 1985, p.172）。」現在生じている人口増加や環境問題、貧困の問題は、価値観によるところが大きい。そのため、単に外から政策を押し付けるだけでは問題の解決にはならず、何世紀も前からある価値観と政策との対立を生み出すだけになりかねない。人々の中に根付いている価値観を理解した上で、その価値観に寄り添った政策を立てる試みが望まれよう。そのためにも、個人や集団の持つ価値観を研究していく必要があろう。

【引用文献】

Allport, G. W., Vernon, P. E., & Linzey, G. (1960). *Study of values: A scale for measuring the dominant interests in personality*. 3rd ed. Boston, MA: Houghton Mifflin.

Gordon, L. V. (1960). *Survey of interpersonal values*. Chicago, IL: Science Research Associations.

Gordon, L. V. (1967). *Survey of personal values*. Chicago, IL: Science Research Associations.

ゴードン, L. V.・菊池章夫 (1975). 価値の比較社会心理学 川島書店

ゴードン, L. V.・菊池章夫 (1981). 増補版 価値の比較社会心理学 川島書店

林知己夫・吉野諒三・鈴木達三・林　文・釜野さおり・三宅一郎・村上征勝・佐々木正道 (1998). 国民性七か国比較 出光書店

Hofstede, G. (1980). *Culture's consequence: International differences in work-related values*. Beverly Hills, CA: Sage.

Hofstede, G. (1983). Dimension of national cultures in fifty countries and three regions. In J. B. Deregowski, S. Dziurawiec, & R. C. Annis(Eds.), *Expiscations in cross-cultural psychology*.

Lisse, Netherlands: Swets and Zeitlinger.

Hofstede, G. (1991). *Cultures and organizations: Software of the mind*. New York: McGraw-Hill.
（岩井紀子・岩井八郎(訳) (1995). 多文化世界－違いを学び共存への道を探る 有斐閣）

Inglehart, R. (1990). *Culture shift in advanced industrial society*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

北山　忍 (1998). 自己と感情－文化心理学による問いかけ 共立出版株式会社

Kluckhohn, F. R. & Strodtbeck, F. L. (1961). *Variations in value orientations*. Evanston,IL: Row, Peterson.

Malinowski, B. (1922). *Argonauts of the Western Pacific: An account of native enterprise and adventure in the Archipelagoes of Melanesian New Guinea*. London: G. Routledge.
（寺田和夫・増田義郎(訳) (1967). 西太平洋の遠洋航海者 中央公論社）

Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.

Mauss, M. (1954). *The gift : Forms and functions of exchange in archaic societies*. London: Cohen & West.
（有地　享(訳) (1962). 贈与論 勁草書房）

Mead, M. (1935). *Sex and temperament in three primitive societies*. New York: Morrow.

Misumi, J. & Ando, N. (1964). A cross-cultural and dia-chronical study on Japanese college student's responses to the Morris' value scale, *Psychologia*, 7, 175-184.

見田宗介 (1966). 価値意識の理論－欲望と道徳の社会学 弘文堂

守﨑誠一 (2003). 価値観 西田ひろ子(編) 異文化コミュニケーション入門 創元社 pp.132-181.

Morris, C. (1956). *Varieties of human values*. Chicago: University of Chicago Press.

NHK 放送文化研究所 (2004). 現代日本人の意識構造 第 6 版 日本放送出版会

新村　出(編) (1998). 広辞苑 第 5 版 岩波書店

Nisbett, R. E. (2003). *The geography of thought*. New York: Free Press.
（村本由紀子(訳) (2004). 木を見る西洋人 森を見る東洋人－思考の違いはいかにして生まれるか ダイヤモンド社）

大山七穂 (1998). 戦後日本の価値観変化－モリスの生き方尺度の調査に見る 東海大学紀要(文学部) 69, 79-92.

サラバナムッチュ, J. (2005). マレーシア:多文化民主社会のミドルクラスという自意識 猪口　孝・M. バサネズ・田中明彦・T. ダダバエフ(編) アジア・バロメーター 都市部の価値観と生活スタイル－アジア世論調査(2003)の分析と資料 明石書店

Sperry, R. (1983). *Science and moral priority: Merging mind, brain, and human values*. New York: Columbia University Press.
（須田　勇・足立千鶴子(訳) (1985). 融合する心と脳－科学と価値観の優先順位 誠信書房）

Spranger, E. (1922). *Lebensformen*. Berlin: Max Niemeyer Verlag.

鄭　躍軍 (2005a). 日本・中国の国民性比較のための基礎研究－中国杭州市と昆明市における意識調査 総合地球環境学研究所研究リポート 01 総合地球環境学研究所

鄭　躍軍 (2005b). 東アジア諸国の伝統的価値観の変遷に関する計量分析 行動計量学, 32, 161-172.

鄭　躍軍・吉野諒三・村上征勝 (2006). 東アジア諸国の人々の自然観・環境観の解析－環境意識形成に影響を与える要因の抽出 行動計量学, 33, 55-68.

The Chinese Culture Connection. (1987). Chinese values and the search for culture-free dimensions of culture. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 18, 143-164.

角田弘子・鈴木達三 (2006). 「一番大切なもの」－東アジア国際比較調査データ分析から幾つかの話題 行動計量学, 33, 1-12.

内堀基光 (2005). 環境と進化 山下晋司(編) 文化人類学入門 弘文堂 pp.27-39.

Vernon, P. E. & Allport, G. W. (1931). A test for personal values. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 26, 231-248.

World Values Survey (2006). World Values Survey: The worlds most comprehensive investigation of political and sociocultural change, < http://www.worldvaluessurvey.org/>(February 6, 2007)

山岡和枝 (2005). 「医療」と「文化」の多次元的連関に関する統計的研究 平成 14～16 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書

吉野諒三(編) (2004a). 東アジア価値観国際比較調査－「信頼感」の統計科学的解析 2002 年度日本調査報告書 統計数理研究所研究リポート 91 統計数理研究所

吉野諒三(編) (2004b). 東アジア価値観国際比較調査－「信頼感」の統計科学的解析 2002 年度中国（北京・上海・香港）調査報告書 統計数理研究所

吉野諒三(編) (2005a). 東アジア価値観国際比較調査－「信頼感」の統計科学的解析 2003 年度（台湾）調査報告書 統計数理研究所

吉野諒三(編) (2005b). 東アジア価値観国際比較調査－「信頼感」の統計科学的解析 2003 年度（韓国）調査報告書 統計数理研究所

吉野諒三(編) (2005c). 東アジア価値観国際比較調査－「信頼感」の統計科学的解析 2004 年度（シンガポール）調査報告書 統計数理研究所

吉野諒三 (2005d). 東アジア価値観国際比較調査－文化多様体解析（CULMAN）に基づく計量的文明論構築へ向けて 行動計量学, 32, 133-146.

Summary

Introduction to Researches on "Values"

Value Differences among Nations, Ethnic Groups and Time Periods

HANAI Tomomi

In this article, I will introduce various researches on values in chapters 2 and 3 and discuss the value differences among nations, ethnic groups and time periods in chapters 4 and 5. In chapter 6, I will discuss the problems confronting value researches and the possible solutions to these problems. Chapter 2 focuses on value researches in cultural anthropology. The fieldwork researches in cultural anthropology have demonstrated that there are several values that are specific to certain regions. For example, the values pertaining to the roles of men and women differ among ethnic groups. Chapter 3 focuses on value researches in psychology. The approaches employed by these researches are roughly classified into two types: typology approach and trait approach. These researches have offered the frameworks to examine values and have developed various value scales. Chapter 4 presents an overview of various values in a number of nations and regions from the World Values Surveys. According to the World Values Surveys, almost all major areas of human values can be summarized into two value dimensions: Traditional/ Secular-rational and Survival/Self-expression values. Furthermore, they suggest that with the progress of industrialization, people tend to place greater emphasis on Secular-rational values and Self-expression values. In Chapter 5, I will discuss East-Asian values on the basis of the results from the East Asia Values Survey. The East Asia Values Survey suggests that "Giri-Ninjo" is a value peculiar to East-Asian countries. It also shows some value areas are related with changing of community structures and economic structures. Chapter 6 discusses how to deal with the profusion of values in an inclusive manner. Cultural Manifold Analysis proposes one possible answer to it. It is believed to be one of the important issues currently confronting value research.